

サブ課題 B「新たな『学び』」と働き方との接続 合同イベント 開催報告

サブ課題 B「新たな『学び』」と働き方との接続 合同イベントが 2025 年 3 月 7 日（金）に開催されました。本イベントでは、サブ課題 B の 4 つの研究開発チームが、現在の研究開発状況を共有すると共に、目指す未来社会の実現に向けて、公開ディスカッションを実施しました。

開催概要

日時：2025 年 3 月 7 日（金）13:00～14:40

開催形式：会場参加のみ

開催案内：<https://www.jst.go.jp/sip/dl/pos/20250307.pdf>

プログラム

13:00～13:10	1. 開会挨拶 サブプログラムディレクター（SPD）／株式会社日本総合研究所 プリンシパル 東 博暢 氏
13:10～14:00	2. 各研究開発課題の情報共有 ・高知大学 大島チーム ・お茶の水女子大学 石井チーム ・国立研究開発法人産業技術総合研究所 依田チーム ・北陸先端科学技術大学院大学 永井チーム
14:00～14:40	3. 公開ディスカッション「個々の輝きが共鳴し、進化し続ける幸福な社会の実現」にむけて 登壇者全員
14:40	4. 閉会挨拶 SPD／株式会社日本総合研究所 プリンシパル 東 博暢 氏

当日の様子

1. 東博暢 SPD より開会挨拶

冒頭、東 SPD は開会挨拶として、内閣府の事業である SIP は省庁横断で取り組むプログラムであり、SIP 第 3 期課題「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」サブ課題 B「新たな『学び』」と働き方との接続では、人口減少を前向きに捉え、学び方から働き方までの広いテーマについて、研究開発を推進し、産官学との接続・連携による社会実装を進めていくと説明しました。

また、今回の合同イベントの趣旨について、1月の施政方針演説¹において掲げられた地方創生や次世代、イノベーション等の観点を踏まえ、地域の働き方を改革する総合的な経済産業政策を考えていくべきであり、本事業もアウトリーチやプロモーションを積極的に展開して、本事業および各チームの取組・活動について紹介していきたいと語りました。

2. 各研究開発課題の情報共有

・高知大学 大島チーム「主体性を醸成する生涯学習プラットフォーム構築と『知』の総合化」

同大学特任助教の宝金実央氏は、「誰でもセンセイ、誰でもセイト」のコンセプトのもと年代や所属等多様な人々が対話・交流により繋がる「サマセミ型学びの場」、子どもたちが教室で魚を飼育し給食で魚を食べる体験をする「出前養殖プロジェクト」、企業や大学が「生活者」の立場で繋がり経済原理を超えて社会の未来を考える「養殖コンソーシアム」について紹介しました。

千葉大学特任講師の縣拓充氏は、デザイナーやアーティストなどクリエイティブな活動を行う方を取り組む「ななめ大学」について、アートの体験・実践を通じて自分に見えていない世界の広がりを認識し、わからない物事にも興味を持ってアプローチする態度や傾向を育み、触発や主体性、創造性を促すと紹介しました。また、「学びのエコシステム」の視点をもって、地域ごとに企業・学校・住民等が繋がる学びのネットワークを作りたいと述べました。

東北大学准教授の佐藤智子氏は、同大学でサマセミ型学び場として「みんなのセミナー（対面）」「みんなのアカデミー（オンライン）」に取り組んでおり、学生コミュニティ SCC（Student Community College）では学生同士が場作りを行い育ち合って社会変革に繋げモチベーションを高める活動を行っていると紹介しました。また、場の心理的安全性を確保する方策や運営側で理想に向かうストーリーを共有すること、自分の理想を描き、ストーリーを紡ぐための振り返りの時間を作ることが大事だと述べました。

・お茶の水女子大学 石井チーム「D&I 社会実現のための学び方・働き方に関する実証研究」

同大学教授の斎藤悦子氏は、2つの実証研究について紹介しました。

実証研究①「高校生を対象とした進路選択に関する大規模調査」は、理工系女性人材育成の加速を図る有効な施策の提言を目指すと説明しました。そのプレ調査では、全国の大学生の回答から、文系よりも理系で、また、男性よりも女性で、進路選択の時期が早い傾向が見られると述べました。

実証研究②「知・経験の D&I 実現のための家事支援」は複数の調査からなり、労働人口確保難を背景に、伝統的な男女役割分担を脱し、仕事や生活の両立、新たな働き方の包摂、男女共同参画社会の創造のためのイノベーション促進を図ると説明しました。

その中の「家事動作調査」では、調査対象の男性が調理の分量や加熱具合の「適当さ」の難しさに直面する様子を紹介し、大人にも子どもにも家事における経験や習慣化が重要性であると述べました。

また、「ポストコロナにおける在宅勤務の現状調査」では、テレワーク導入企業および従業員の回答

¹ 第 217 回国会における石破内閣総理大臣施政方針演説（令和 7 年 1 月 24 日閣議決定）

<https://www.kantei.go.jp/jp/103/statement/2025/0124shiseihoshin.html>

の結果、在宅勤務は従業員のゆとりや健康維持、通勤負担の軽減、仕事と家庭の両立、離職防止に繋がったと考えられることや子連れ出勤のメリット・デメリットの両面について触れました。

さらに現在進行中の男性育休に関する調査について、家事や育児の分担状況を世帯として把握し、職場内のジェンダー公平性を明らかにする予定と紹介しました。

- ・国立研究開発法人産業技術総合研究所 依田チーム「重度障害者のインターフェース革新による地域教育就労モデルの構築」

同研究所の主任研究員である依田育士氏は、重度運動機能障害者の不随意運動があっても使いやすいインターフェース革新を図り、3D カメラと PC を用いて対象者から様々なジェスチャのデータを収集し、類型化して 9 つの認識モジュールを開発したと説明しました。

利用者の動画を投映しながら、文字起こしの際のジェスチャの併用や、ゲームの際のスイッチの併用により操作がしやすくなった様子等を紹介しました。

社会実装には、病院でのジェスチャインターフェースの使用、サポートの専門家への教育や体制整備、個人による就労や教育のための利用等のステップを踏むことが重要で、最終的に仕事に繋がることがゴールだと語りました。そして、実際の各研究機関・医療機関との連携や、日本作業療法士協会等での講習会、特別支援校での教育、オンラインゲーム会の様子等について紹介しました。

また、ジェスチャインターフェースの海外展開については、既にデンマークでは高齢者や障害者のための展示施設で採用され、実際に利用も開始されており、ノルウェー等でも展開していると説明しました。

国際標準化活動として、例えばキーバインドやメニュー選択のループ等、障害者だけでなく誰もが使いやすくなるユニバーサルデザインの提案を行っていると述べました。

- ・北陸先端科学技術大学院大学 永井チーム「共創的実践で社会を変革する博士人材育成プログラム－大学院リーグのプロトタイプと実装－」

高知大学教授の菅沼成文氏は、イノベーションを主導できる総合知と駆動力を持った博士レベルの高度人材育成が急務であると述べ、大学院リーグについて「共創」と同時に「競争」し合う関係でもあり得ることについて言及しました。そこで、三重大学の地域イノベーション学研究科の事例や海外の事例等も参考にしながら、新しい仕組みによる博士人材育成プログラムのプロトタイプを提案しようとしていると説明しました。

北陸先端科学技術大学院大学は、大学院リーグのデザインや産業界との連携プラットフォームの構築、宇都宮大学は大学院リーグの共通科目になる「ニューフロンティア・プログラム」等の実装、高知大学はヘルスケアイノベーションの実装と海外調査に取り組んでいると紹介しました。

これらの取組を通じて地域・企業との連携や博士課程の再定義を行うことを目指し、大学院リーグ版のトランスファラブルスキル評価を行ったところ、各大学の特色を反映した結果が表れたと述べました。

また、社会人博士の時間の使い方について、在学生や修了生を対象とした調査では、研究時間の捻出のために仕事の仕方を変える必要があることが明らかになっていることを紹介しました。さらに、博士の意識改革として、自分たちはトランスファラブルスキルを持っており、様々な場面で応用でき

ると意識することが重要であり、大学院リーグでは、国内の視点に留まらず、国際的な視点をもって大学・地域・人物・社会等様々なイノベーションを進めることができる博士人材育成を目指していると説きました。

6. 公開ディスカッション「個々の輝きが共鳴し、進化し続ける幸福な社会の実現」にむけて
東SPDのファシリテーションの下に、6名の登壇者が議論を行いました。



永井チームのトランスファラブルスキル評価と、大島チームの取組を通して学生のどのようなスキルが伸びていくかという分析とが繋がっていくと良いとの議論がありました。また、国内の大学院の多くは、社会との関わり・繋がりや、研究と社会課題を結び付ける仕組みが不足しているとの指摘のもと、マッピング等により個人や全体のスキルのバランスを可視化できると良いとの意見がありました。

石井チームが取り組むジェンダードイノベーションの実現や依田チームの国際標準化の取組のように、社会システムを変えていく研究者が必要であるとのコメントがありました。これを受け、学生においても専門教育だけに留めることなく、自分の専門分野が社会でどういう位置付けなのかという視点をもって、自治体や企業等とも積極的に交流・コラボレーションすると、レベルアップや他の研究者とも繋がるきっかけになり得るとのアドバイスがありました。

大島チームの取組に関連して、陸上養殖系のスタートアップが増えており、気候変動や食料安全保障・安定的供給を背景に、海と陸との地域連携も進みつつあること、また、石井チームや永井チームの取組に関連して、社会人の時間の使い方や働き方の変革が進みつつあること等について言及がありました。これらを踏まえ、社会の急速な変化の中で主体性をもって現状から如何に段階的に成長していくのか、キャリアパスが整理されていくことの必要性が示されました。

依田チームの障害の有無に関わらず誰もが使いやすいインターフェースの開発について、軍用技術開発の一般化といったプロジェクトの例を挙げ、他の3チームの取組によって横断的・革新的な成果を生み出す人材育成への期待が示されました。これに関して、従来的な学問分野を跨ぐ者同士の連携は容易ではないという実感や、博士人材はトランスファラブルスキルとある種の「突き抜ける」要素の両立が鍵となることの示唆がありました。

5. 閉会挨拶

東SPDが、5年に渡るプロジェクトの中間的な成果報告を行うことができたことに感謝を述べ、今後も一層の展開を図りたいと意気込みを語りました。また、同一会場における関連イベント「ディープテック対象ピッチコンテスト『TokyoTCP』最終報告会」²や「共創の場形成支援プログラム 共創分野・地域共創分野 公開フォーラム『データで拓く未来のヘルスケア社会』」³を紹介し、更なる交流や発展の可能性を示して締めくくりました。

以上

² ディープテック対象ピッチコンテスト「TokyoTCP」最終報告会および交流会開催のご案内
<https://www.jri.co.jp/page.jsp?id=110022>

³ 共創の場形成支援プログラム 共創分野・地域共創分野 公開フォーラム「データで拓く未来のヘルスケア社会」
https://www.jst.go.jp/pf/platform/site_r6_forum.html